



日蓮宗の年中行事

☆秋彼岸会

☆宗祖御法難会

☆御会式

日蓮宗で行われている代表的な年中行事には、釈尊涅槃会・宗祖降誕会・春秋彼岸会・釈尊降誕会・立教開宗会・孟蘭盆会・宗祖御法難会・御会式などがあります。

当山では九月以降、秋分の日(九月二十三日)を中日として前後三日、つまり、七日間、彼岸会の行事を行います。昔から「暑さも彼岸まで」といわれるように、この日を境に夏から秋へと季節が移り変わります。こうした良き日に、先祖の墓参りをし、煩惱に満ちあふれた醜い世界(此岸)から抜け出し、安らぎのある清らかな向こう岸の世界(彼岸)を望み、新たな気持ちで明日を迎える決意を持つ事が大切だと思います。又、九月十二日は日蓮聖人が竜口で法難に遭われた日、お婆さんが竜口の刑場に送られる日蓮聖人に「ぼた餅」を供養したという言い伝えにより、当山では、お題目講の方を中心に「ぼた餅」を供えて法難会の法要を行います。この「ぼた餅」を食べると厄除けになると言われています。又、お会式は、日蓮聖人の忌日に営まれる法会で、一般に御会式(おえしき)とよばれ、今日では宗門最大の行事になっています。聖人は弘安五年(一一八二)十月十三日の朝、武蔵の国池上(東京都大田区)の地において六十一歳の生涯をとりられました。この地を中心に全国の寺院でいろいろな形の法要が繰り広げられています。



水がら 寶清寺

当山では、毎年十月十二日の午後二時と七時の二回法要を厳修しています。当日、厄除け・家内安全・交通安全・子育て鬼子母神等の祈願の受付もしています。関係が、毎年大勢の方の参拝があります。客殿にて手打ちうどんを召上がついていただいたり、屋台の店で買い物したり、バザーも開催されます。

「法華経」の教えによって、民衆の苦悩を救済しようとした日蓮聖人の生涯。こうした聖人の活躍を恐れられた僧侶達「竜口法難」です。

日蓮聖人の四大法難

- 松葉谷法難、伊豆法難、小松原法難、竜口法難

仏壇のまつり方(仏壇は心静かに礼拝できる場所)

①南面北座説 仏壇を南側に向け安置する説です。日本の家は南側に向けて建てられているのが普通です。これは風通しなど日本の気候条件に適っているからです。南向きというのは湿度、風通しなど仏壇の保存においても最適の場所と言えます。これは御本尊やご先祖を敬うという考えに基づいていると言えます。

②本山中心説 仏壇をその家の所属する宗派の本山のある方向に安置する説です。合掌した時、その延長線上に所属する宗派の本山があることになり、折り返して西に向く事になるから、西方極楽浄土を拝むことになるという説です。日本の家の場合、ごく自然に全く違う宗教が同居していることがありますが、この場合、仏壇と神棚は別の部屋にしたほうが良いでしょう。それが無い場合は仏壇と神棚は向かい合わないよう安置したいものです。

③西方浄土説 仏壇を東側に向けて安置する説です。仏壇が東側に向けてあると、お申し込み下さるようお願ひ致します。来年的お彼岸まで受付ます。

は、迫害弾圧の歴史でもあった。立教開宗した聖人はただちに幕府の置かれた鎌倉に出て松葉谷というところに小さな草庵を建て、説法を始めた。当時、わが国は幕府に働きかけ「まだ生き延びては不都合である」という理不尽な罪名に、弘長元年(一一六一)五月十二日、聖人を伊豆国伊東に流罪にした。これが「伊豆法難」です。弘長三年二月、時頼は聖人の流罪が不当だったことを知り赦免した。この翌年久しぶりに故郷の安房国小湊へ帰る途中、東条郷の小松原で文永元年(一一六四)十一月十一日、聖人に深い恨みを抱いていた地頭の東条景信らの一党に襲われ、弟子の鏡忍房と天津城主・工藤吉隆は殉死、聖人自身も眉間に傷を負われた。これが「小松原法難」です。それから七年後の文永八年(一一七一)九月十二日、聖人の予言がごとごとくの中ずることに面目を失った極楽寺良観、建長寺道隆ら当時の仏教会の長老はますます聖人を憎悪し、今度こそ聖人を殺そうと再び幕府を動かして聖人を捕らえ、竜口刑場で首を切ろうとした。その時、空中に月のような光が走るなどの不思議な天変が起こり、とうとう聖人を断罪する事ができなかった。これが、「竜口法難」です。

は幕府に働きかけ「まだ生き延びては不都合である」という理不尽な罪名に、弘長元年(一一六一)五月十二日、聖人を伊豆国伊東に流罪にした。これが「伊豆法難」です。弘長三年二月、時頼は聖人の流罪が不当だったことを知り赦免した。この翌年久しぶりに故郷の安房国小湊へ帰る途中、東条郷の小松原で文永元年(一一六四)十一月十一日、聖人に深い恨みを抱いていた地頭の東条景信らの一党に襲われ、弟子の鏡忍房と天津城主・工藤吉隆は殉死、聖人自身も眉間に傷を負われた。これが「小松原法難」です。それから七年後の文永八年(一一七一)九月十二日、聖人の予言がごとごとくの中ずることに面目を失った極楽寺良観、建長寺道隆ら当時の仏教会の長老はますます聖人を憎悪し、今度こそ聖人を殺そうと再び幕府を動かして聖人を捕らえ、竜口刑場で首を切ろうとした。その時、空中に月のような光が走るなどの不思議な天変が起こり、とうとう聖人を断罪する事ができなかった。これが、「竜口法難」です。

お題目講の納経について

日蓮宗では平成十四年(二〇〇二)の立教開宗七五〇年慶讃事業としてお題目の納経を行います。お題目及び祈願文を記入し一枚につき、三〇〇円の納経料を添えて申し込むだけで、誰でも簡単に納経できます。祈願用紙は管理事務所用意しております。ご法事・お会式等で来寺の折、お申し込み下さるようお願ひ致します。来年的お彼岸まで受付ます。

